

はしがき

全国の法学部で教えられている専門科目を通覧すると、すべての大学で日本法「制」史が置かれているわけではなく、また置かれていても実質的に近代法史を内容としている大学が多いことに気が付かされる。

前近代の法史は、法学部にとって学ぶ必要のない科目なのだろうか。何とか、前近代の法史を学ぶ意義と愉しさを、法学部生の皆さんに知ってもらえるような日本法史入門書を作れないものだろうか。こうした問題意識から生まれたのが、本書の旧版『史料で読む日本法史』（二〇〇九年十月刊、二〇一六年に新版刊行）であった。

同書は、従来の概説書のような、時代ごとの体系的な叙述スタイルをとらず、現代の法制度・観念から見て異質で興味深いと思われたテーマを選び、史料を読み解きながら解説を加えるという、新しい手法を用いたことが功を奏して、皆さんから好意的に迎えられ、版を重ねてきた。

版を重ねるごとに、少しずつ新しい項目を加え、先の時代からの接合と次の時代への展望を示す叙述を増やし、難解で読みづらい史料にルビを付けるなど、様々な補訂を行ってきたが、旧版の初版から既に一五年が経過し、この間に研究が大きく進展した分野も多く、それを反映させる必要を強く感じるようになった。そこで、項目を最初から見直し、新たな執筆者にも加わってもらって、全面的に改版したのが、本書『史料でひもとく日本法史』である。

本書で取り上げたテーマは、日本法史における重要問題のうちの、ほんの一部分にすぎない。各時代の政治・経済・社会状況や法・裁判制度の全体像などについては、日本法史の基本文献を参照してほしい。本書の理解に大いに役立つであろう。

本書の企画から編集作業に至るまで、編集部の舟木和久氏のご尽力に負うところが大きい。厚くお礼を申し上げる。

執筆者を代表して

村上一博